

「キリストを受け取る」
ヨハネの福音書 1 章 11-14 節

今年もアドベントの時を迎えました。本日はヨハネの福音書 1 章 11-14 節から、神がキリストをこの世にお送りしたのが、どれほど恵み深いことであったのかということとともに学ぶことができればと思います。

「信仰」をどう定義するかによりますが、仮に、そこに神を待ち望む側面があると考えたのであれば、神に対する絶対的な信頼がなければ信じることは不可能であると言えます。口先だけで信じるというだけのことでは何の意味もありません。

ところが、神を信頼しようと思ったところで、神を信頼する心は簡単には生まれてきません。信頼する方はどのようなお方なのか、一個人として信頼すべき理由があるのか、そのあたりをまず、よく考えておかなければなりません。それが疎かであれば、人はいとも簡単に自分のわざに頼るような生活スタイルに戻ってしまいます。

では、その信頼するお方はどのようなお方なのか。それはみことば全体を通して語られていることではありますが、キリストがこの世に来たことについて教える本日の箇所においてもその核心的な部分が語られています。

まず、11 節はキリストについて次のことを言っています。

11 節

この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

キリスト者の信仰は、神の様々な働きかけを土台にして、生まれてくるということが言えます。この世の宗教というものは、人が神を創り出し、その神を求めるといった人間の努力の産物だとすれば、聖書の教えるのは逆で、神のほう人間を求め、どうにかして救いを与えようとしていると言えます。

この箇所でも、人が神を求めたのではなく、神の方から自主的に歩み寄り、ご自分を提示したということが言えるのではないのでしょうか。

しかし、人間側は歓迎しなかったとヨハネは言います。キリストがこの世に来た時、キリストはご自身の民であるイスラエルに來ました。その民に対する期待は少なからずあったようです。ところが、その神をもっとも待ち侘びているべき民、神とともに歩んでいるべき

民が、神を待ち侘びていませんでした。

民は待ち侘びるどころか、キリストが自分たちの信仰している神であるという思いさえ頭をよぎらなかつたのではないかと思います。この箇所という「ご自分のところ」「ご自分の民」とは神の認識を言い表しているのではないかと思います。民がキリストを「自分たちの神」とは認識していたとは書いていません。ですので、民はキリストについて、実に初歩的なところで躓いてしまったということになります。神とは誰なのかということさえも分からなくなっていました。少なくとも、神からすれば、当たり前なことがイスラエルの民にできていなかったと映っていたのではないかと思います。

しかし、民が非常に初歩的なところで躓き、キリストを拒否したからと言い、すぐにさばきが降ったわけではありませんでした。そこにはさらなる忍耐があったということも覚えなければなりません。

振り返ってみますと、ここには示唆に富む真実が言われているのではないかと思います。本物の神とは、創造者であり、すべての人間が自分の創造者として知っている神だと言えます。ところが、それと矛盾するようではありますが、墮落した人間はその神が神だとはっきりと意識できない状態に陥っています。神であるキリストが人となって、人とともにいても、ほとんどの人が拒否しました。まったく理不尽なことですが、それは神にとっても理不尽に映っているようです。

本日の箇所の少し前となりますが、著者であるヨハネは、バプテスマのヨハネが神ではなかつたということをも説得しなければならなかつたようです。バプテスマのヨハネについて「彼は光ではなかつた。ただ光について証しするために来たのである」と書かれています。それほど、人の感覚はおかしくなっていたのであります。

すると、神は実におかしな状態になっている人に対してキリストを提示したと言えます。そんな人間に対してさえも真実な方であり、「どうしてそこまでするのか」と思わせられるほど人の説得を試みておられます。

しかし、キリストを知るのは実に難しいこと、不可能と言ってもよいようなことだと言えます。それがどれほど難しいことなのか、13節において説明されていますが、その前に12節。私訳をお読みいたします。

12節（私訳）

しかし、この方を受け取った人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる

力をお与えになった。

神が譲歩していると言うとき、それがどれほどのものだったのか。12節の冒頭で「この方を受け取った人々」と言われていますが、この表現においても神のめぐみの大きさが表されています。

「人が神を受け取った」という表現は聖書のなかでは珍しい言い回しですが、これはヨハネが考え出した独自の表現だった可能性があります。なぜ他の聖書記者たちがこの表現を用いなかったのかは、その意味を考えてみれば明白だと言えます。この表現は、神と人間との間の関係性が本来あるべきものの逆になっているかのような表現だからです。神が人を受け入れると言うのであれば分かるのですが、ここではその逆となっています。

人は罪の中にあり、神に敵対しているという事実があります。しかし、ヨハネは、それでも神が人間に対して最大限にへりくだった態度を取り、下からご自分を人間にご提示したということを知りたいようです。その結果として、キリストはこの世のすべての人に提示され、キリストを受け入れるかどうかはその人次第といった状態になっているということでしょう。

しかしこれは同時に、キリストを受け入れない人には厳しいさばきがあるということでもあります。神がこれほどへりくだって人に譲歩したにも関わらず、それを不要と考えたのであれば、凄まじい怒りが人に降り注ぎます。

12節の後半ではキリストを信じる者がどのようなになるのか、解説されています。信じた者には神のこどもとなる力が与えられています。つまり、その人がそれを求めるのであれば、神の似姿である子となることができるということでもあります。

このことは、次節とも関わってきます。

13節

この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

神の子となる過程には、生まれ変わることが含まれるとヨハネは主張します。この神によって生まれるということは、よく考えてみますと非常に独特な表現であると気付かされます。

この、神によって生まれるという言い回しは、ヨハネがよく使うものですが、すでに生ま

れた人がもう一度生まれるということですので、人そのものが変わってしまう大きな転換点のことを言っているのであろうことが想像できます。しかし、肉体的に人がもう一度生まれることが不可能であることを考えますと、靈的にもう一度生まれる体験も不可能であると言えます。

ヨハネはさらに、生まれ変わるということがどのようなことかを説明するために、それが何と違うのかについても触れています。「血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく」。ここでは「血による」「肉の望むところによる」「人の意思による」という三つの方法で人が生まれ変わる場合と、神によって生まれ変わる場合が対比されています。

前者の「血による」「肉の望むところによる」「人の意思による」とは、人間の様々な努力のことを言っていると言えます。自分の行いを変える努力をすること、人間的な知恵に頼ることなど、この世のものに頼った変革のことでしょう。人間的な努力を全否定する必要はありません。人は神を求めるときに努力を重ねてみる必要もあります。ただここでは、その人間的な努力により、新しく「生まれる」ことはできないとされています。

しかし、「肉の望むところでも人の意志によってでもなく」と言われていることを見ますと、ヨハネにとって「神によって生まれる」ことは非常に限定された現象だったと言えます。それは「肉が望まない」ものであり、「人の意志」から出てこないようなことでもあらうと言えます。

神によって生まれることが難しいということは、今日の箇所 2 節前にある 10 節に示唆されていました。「この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。」ヨハネからすれば、創造者であるキリストのことを世が知ることができないほど、世と神の間に断絶があるようです。この世には様々な思想を持つ人がいますが、この世から生まれる思想のどれもキリストを受け入れるものではありません。あらゆる創作的工夫を施して生み出されたこの世のどの思想も、神に到達していなかったという事実があったのです。

ですので、ヨハネが言う「神によって生まれる」という出来事は、人間の意思で到達し得る常識的な範囲内、もしくはその延長線上にあるのでもありません。それは人が選ばないような道、肉の望むところ、人間の意思に逆らっていくような道にあると言えます。

旧約聖書においてしばしば「砕かれた心」ということばが登場しますが、まさに肉の望むところ、人の意志が砕かれてはじめて到達できる場所があるのではないのでしょうか。しか

し、その状態に到達するのは非常に難しいと言えます。キリストはニコデモに言いました。「そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」闇を愛するというのは自分の様々なプライド、功績、富、知恵、社会的な立場、家族とのしがらみなどを言うようですが、人はそれから離れません。しかし本来的にはそうしたプライドがあったからこそ自分はさばかれるという真実を受け入れるところに至らなければなりません。

ですので、自分の意志や肉的な希望が砕かれ、この世に望むものがない人、そのような人が神によって生まれるということをヨハネは言っているようです。肉的な望みや人間的な意志と神の力が伴うかたちで人は救いを得るのではなく、人間的なものが破綻してはじめて、神の力が働き、新たな人が生まれるということでしょう。

ここでもう一度 12 節に戻りたいと思います。

12 節（私訳）

しかし、この方を受け取った人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる力をお与えになった。

ここにはキリストを受け取り、信じる人々に神の子となる力が与えられたとありますが、その「受け取り、信じた」人々もまた、自分の意志や肉の望みによって生まれたわけではなかったということも覚える必要があります。

ヨハネにとっては、神を信じるということと、人の意志は対立的な関係にあると言えます。両方が共存するといったようなことではないでしょう。人は両方が共存すると、どうしても自らの意思を優先するものです。よって、信じた人、というとき、その人の意思や力で信じたわけではなく、誇ることは何もありません。むしろ、もう何もこの世に希望が無くなってはじめて、人間として当たり前な「神が神だったことを認める」ことができるようになると言えます。

ここでもう一度、この「受け取った」という表現について考えたいと思います。新改訳はこれを「受け入れる」と訳していますが、これはどちらかと言えば「受け取る」という概念です。この「受け取る」という行為は非常に簡単なことです。

なぜ、ここまで簡単な行為として信仰を捉えているのでしょうか。それは、弱い人にとっては本当にシンプルなことだからではないのでしょうか。何も残っていない人。誇るものが何

もない人。そんな人に、神が自主的にへりくだったお姿で現れ、そのような人を探し求め、ご自分のものとして取り戻そうとしている。そういった場合、その人は難しい神学的な学びをするわけでも、立派なささげ物をするのでも、正確な信仰告白をするのでもありません。ただ、キリストのお姿が神のお姿そのものであったことを認め、キリストを受け取るのであります。

一例としてですが、福音書に登場する取税人や娼婦は信仰を難しいことと考えていたのでしょうか。信仰について学んで分かったといった感覚はなく、ただ感謝を持ってキリストを受け取った感覚だったのではないのでしょうか。何も持っていない弱い人にとっては、信仰がそういった単純なことである面があるのではないのでしょうか。

続く 14 節においては、信仰者の視点でもう一度同じことが言い直されています。

14 節

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

神の栄光はこの世を満たしているものの、それはないものとして無視されているものだと言えます。しかし、信仰者たちはキリストの栄光を見ることができるようになりました。人となって現れたキリストが神であると気づけたのです。

その栄光はこの世のものとはまったく質が違うものだったようです。この世の栄光は王宮にあるようなものだと言えます。権力や富などが栄光と考えられます。しかし、キリストの栄光はその恵みとまことのほうにありました。

では、そのめぐみですが、それはどのあたりにあったのでしょうか。まず、それは大多数の人には見えないところにあったと言えます。皆が実感できるようなものではなかったようです。しかし、自分が罪人だと自覚した人にだけ見えためぐみがあったということです。罪の赦し、そして神の子となる力が与えられたことがめぐみであったと言えるのではないのでしょうか。赦されるべきでない人のために、神がへりくだって、赦しの約束を果たし、罪人に赦しを与えたのです。

そのような神の栄光ある働きは、自分が罪人だと思っていない人には分からないことでもあります。いや、罪を告白している人でさえも、本気で自分は罪人だとは思っていない場合もあり、そういった場合ですと、自分は罪を告白して「あげた」という意識しかないと言えます。しかし、そういった人に神のめぐみとまことが見えるのでしょうか。

今日はヨハネからキリストを信じることについて学んできました。ヨハネは非常に抽象的なところでこのことを説明していますが、具体的にどのように適用できるのかを考えてみたいと思います。

まず、人の信仰生活は「血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によって」成り立っているか、神によってのものか、どちらかだと言えます。つまり、そこにははっきりとした区別があるということをお覚しておきたいと思います。

ヨハネはその区別をする必要を感じたこと自体、肉的に生まれ変わった人を意識してのことだったのかもしれません。名誉を得られる、人を喜ばせることができるなど、間違っただ理由で信仰生活を送る人もいないのでしょうか。しかし、そういった肉的な現実があっても、本人にはなかなか分からないものであると言えます。ただ、それは最終的には、自分は隣人を愛しているのかどうか。この問いを答えることによって分かるものであります。

そもそも、信仰の発端にあるのは、人生の破綻であると言えます。破綻してはじめて、神を信頼するという意味が見えてきます。破綻していない人は、必ず肉の力で偽りの信仰を創り出してしまふものであります。しかし、破綻したのであれば、はじめてキリストとその栄光を知る、しかも人生の方向性自体がまったく変わってしまうような意味で知ることができるようになるのです。

さて、ここで、冒頭でお話しした問題に戻りたいと思います。人生が破綻した時に、私たちは何故キリストを信頼すべきなのか。神はどのようなお方なのか。この箇所から何が言えるのでしょうか。

まず、キリストが送られたということ自体大きなめぐみであったことを覚えるべきでしょう。神は下手(シタテ)に出て、大きく譲歩してくださっていて、その結果として私たちに、キリストを受け入れるのか、受け入れないのかという二択が提示されているのです。罪人に対する、当然ではない寛容な態度がそこにはあります。私たちが信頼すべきお方はそのようなお方であり、人間のように偽りのある方ではありません。それは神を信頼するのに十分以上の事実ではないのでしょうか。

そして、できる限りの譲歩をすでにしてくださっていますので、もし私たちが信頼するのであれば、お導きを出し惜しむことはないでしょう。すでにひとり子をお与えになったお方が、そのような出し惜しみはされません。

神を信頼する理由をもう一つ申し上げるのであれば、このお方には力があります。この世はキリストを通して創造されました。その同じお方は、罪の中に生きている私たちを変えることができます。この世の壮大な自然を創った力ある方は、私たちをも変えることができるのではないのでしょうか。

神にとって不可能なことはありません。私たちの救いは神に救う力があるかどうか、または神に愛があるかどうかという点にかかっているのではなく、私たちがこの世を愛することをやめ、キリストを受け取ることができるのかという点にかかっています。

ですので、神のあり方はすでに包み隠されることなく、提示されているのです。むしろ、問われるのは神の態度ではなく、そのようなお方を信頼するのか、いや、それ以前に信頼する必要性を感じるのか、そのあたりの私たちの態度のほうであると言えます。

自信満々の人はその必要性さえ分かりません。ほとんどの人にとってキリストは不要であります。さらに言えば、この世の人は誰も神が神だと気付けません。本物の神は、神だと誰にも思われたい。そういうものだと覚えておかなければなりません。

さて、ここまで神を信頼する理由を考えて参りましたが、このように考えますと、私たちには当然な選択が求められているように見えます。しかし、自分のいかなる力に頼るのもやめ、ただ神を頼り、そのわざが行われるのを信じて待つのは、墮落後の人間にとっては至って困難であることも付け足しておくべきでしょう。

では、私たちはどのようにするべきか。「キリストを受け取ります」と告白すればいいのでしょうか。そのように受け取ることは最終的には必要なのかもしれません。しかし、どうしてもそのようにすると意識するのは少々高慢であるように思えてなりません。自分の力を信じられなくなった人は本当にそのように意識的に考えるのでしょうか。罪人は「気づいたら受け取っていた」という感覚なのではないのでしょうか。「キリストを受け取ろう」と考える前に、へり下り、自分の罪を認め続けることのほうに集中することのほうの方が大切なのではないのでしょうか。

律法に面と向かって、それを行おうと努力した人。その結果として自分はおかしくなっていて、立ち返る力がない、立ち返る方法さえも分からなくなった人。キリストを受け取るという単純なことさえも行う力がないと気付いた人。そのような人にこそ御霊の力が働き、導きがある。そのような人にはキリストの神としての栄光がよく見えるようになる。そして、信仰が、栄光あるキリストを「受け取る」という単純なことに見えてくる。神はそのような

人を新しく生まれさせることができる。これらのことを確信した上で、アドベントの時期を迎えたこの時、私たちは本物の神を見つけ出し、キリストを受け取る者になりたいと願います。

祈り：恵み深い父なる神様

私たちはアドベントの時を迎えた本日、キリストが人となり、この世で住まわれたことがいかに大きなめぐみであったのかということを実感しました。そのようなあなたのわざを要求する資格は私たちにはありません。しかし、あなたは自主的に、めぐみ深く接してくださいました。

それでも、私たちは時にはあなたの恵み深いわざを軽視し、その必要性さえも分からなくなってしまうことがあります。今一度あなたの前にへり下り、自分の墮落した状態を認めるものとしてください。そして、キリストの栄光が見えますように、お導きを置いてください。

感謝して、イエス・キリストの御名によりお祈りいたします。アーメン。